

日本歴史地理学の展開

福 井 好 行

我国の歴史地理学を述べる場合に、どうしても最初に置かねばならぬものは奈良時代の「風土記」である。それは歴史地理学と呼ぶにふさわしいものであるかどうかは別として、我国地理書の最古のものである事には異存ない事と思ふ。

元明天皇の和銅六年、五月の甲子（二日）「畿内七道の諸国郡郷の名は著^レ好き字^一を、其郡内所^レ生ずる銀銅彩色草木禽獸魚虫等の物、具に録^{さしめ}ニ色目^一、及土地の沃瘠・山川原野の名号所^レ由る、又古老の相伝旧聞異事は戴せて千史籍^一に言上せよ」との詔によって、各々国毎に撰進されたと思われるが、不幸にして現存のものは、常陸・播磨・出雲・肥前・豊後の五ヶ国に過ぎず、其他は散逸して断簡（例えば仙覚の万葉鈔等）に依らねばならぬが、其の意図する処は、諸国の伝承事蹟の蒐集整理にあつた。

此の状態は其後久しく続いて行つた。即ち平安時代以来、土佐日記・更級日記・東関紀行・南海流浪記・十六夜日記等、旅の記録に地誌的記載が認められるが、所謂「地理書」となつたのは徳川時代に入つてからの事で、正徳の頃の「山城名勝志」を始め、享保の大和志・河内志・摂津志、宝暦の房総志料・但馬考・播磨鑑、文化の頃の南路志・阿波志、文政の全讃志等、各国名藩に地誌編纂の事業が起つて、今に其の恩恵を及ぼしている。又此頃、名勝図会・

膝栗毛の類の刊行が盛んになって、都市・町村の風物を叙してあるのが目立つようになったが、思うに国内交通の発達は庶民の地理に就ての関心を深からしめ、土地に對する興味が盛んになったからに相違ない。

然し乍ら、之等の多くは、それ自身、資料的意義を持つに止まり、「歴史地理学」として認められる様になつたのは、西洋流の科学的研究法が行われるに至つた明治の中頃即ち、日清戦後の我國運の興隆期に入つてからの事であつた。

二

明治三十二年十月、喜田貞吉・藤田明・大森金五郎・堀田璋左右・岡部精一・小林庄次郎等の諸氏相はかつて日本歴史地理研究会（後に日本歴史地理学会と改称）を興し、大正十二年九月、関東大震災に及ぶまで雑誌「歴史地理」を發行し、毎年の様に夏期講演会を各地に開い設立の趣旨を實現弘布するに努めた。

今其の意図するところを設立趣意書に見る、「地理学は史学の眼の一なりとの語は陳りたり。之を地理・歴史相關する所以の根本理に見ざるも、例えば、古戦場の実地踏査が、如何に其戦の面目を明らかにするか、或は古代道路・宿駅の研究が如何に当時の社会を想像するに裨補する所あるか、或は群雄割拠の世に於ける封疆の調査が、如何に其国力消長する所以を示すか等、地理は最も価値ある史料（傍点筆者）の一として、史的事実研究上尠少なからざる光明を与ふるを見るべし。是を以て史家は到底地理を閑却する能はざるなり。

殊に、我日本国の如き、四国環海の國、其海岸線の変化非常に著しく、国内は河川環流して其流域もまた大變動を蒙り、所謂桑田變じて滄海となる如き、地理の変遷多き、邦國に於て、其古代地理の研究より始めずんば、各時代歴史の真相は到底窺ふ能はざるなり。月本歴史地理研究会の起らざるべからざる所以、實に此にあり。」（雑誌「歴史地

理」第一巻第一号)その雑誌「歴史地理」の中心人物として後年永く活動したのは、徳島県立江町櫛淵の出身喜田貞吉博士である。(其家は旧屋号「北」を維新後、喜田と改めたので、「キタ」といい、「キダ」とは濁っては呼ばない)。明治十九年東京帝国大学国史科卒業後、大学院に於いて「日本の歴史地理」を専攻、明治四十年二月以来昭和十四年に及ぶ前後三〇年間京都大学講師・教授として「日本歴史地理学」の建設に尽した功績は大きく、京大史学科卒業生が歴史地理学に興味を寄せ、此方面に縦横の活躍を示して居るのは、一に京大の学風にも由るが、直接間接に喜田博士の影響、与つて力あるのを憶うのである。

魚澄惣五郎博士が且て昭和八年、雑誌「歴史と地理」に連載し、後、まとめて「歴史地理の研究」巻頭に置いた「日本歴史地理と古代の村落」の中で述べられた次の語は明らかに其の影響を示している。「元来今まであまりに歴史事象に対する地理的關係が閑却され過ぎていた。……歴史地理は地理の歴史的研究ともいひ得るのであるから、土地の物理的変遷をも考へねばならない。即ち日本歴史地理では、わが国河川水路の変遷や海岸線の変動などを考察にいれねばならぬ重要事項であることは勿論であるが、しかしこれらのみを以て本体とすべきではない。……要するに日本歴史地理は、わが国民文化発展の過程をその地理的環境を通じて考察し、地と人との關係についての地域的認識を明らかにするものでなければならぬ。」とされ、右の書物中にも「風土記に現はれた地名」「歴史上より見たる但馬国山川の流域」「大楠公の本拠地とその地理的環境」等をものせられた。

勿論、京大史学科では、其の創設者内田銀蔵博士が、風に歴史地理学の必要に着眼せられ、文学部史学科の内に地理学教室を包摂し、「史学と地理学との關係」等、講論集「史学理論」の中に盛られた博士の着想は、史学科経営の中に着々実現せられて行った。又東洋史学科諸教授の中にも桑原隲蔵、小川琢治諸博士の歴史地理学的研究に輝かしい

業績を残して、日本歴史地理学に刺戟を与え、後年の藤田元春、内田寛一・小牧実繁等の諸先生を産むに至ったのは京大の学風に負う処が大である。

三

喜田博士を語った私は、殆ど時を同じくした吉田東伍博士も逸する事が出来ない。吉田博士は越後の生れ、正則に学校教育を受けず全くの独学で小学校教員の免許状を得、鮭漁者として活動の傍「鱈斧生吉田東」の筆名を以て雑誌「歴史地理」に数々の論文を発表せられた。後上京して読売新聞社に入り、「落後生」のペンネームで椽大の筆を振られた。其の博大な学殖は殆んど古今独歩の觀があり、歿後世に出た論文集「日本歴史地理之研究」は不朽の述作で、明治三十四年以來、早稲田大学教授として、特に四十一年からは殆んど毎年の様に日本歴史地理学会の夏期講演会講師として出張、各地の人々に親しまれた事は「各時代史論」・「尾参遠郷土史論」等に明らかで、就中「瀬戸内海権史論」「莊園制度大要」は今日の水準を以て見ても立派な参考書たるを失わぬ。大著「日本地名辞書」も独力で作られたもので、鏡子に急逝されるまで其の訂正増補の機会を待つて居られたという、博引旁証、幾多の古記録・古文書を以て証論された精力は觀る者をして驚嘆せしめずには措かぬ。

以上通覽してみると、「日本歴史地理学会」の諸先生は、文献史学的研究に傾倒されたのが特色と思われるが、喜田博士が大正四年日本学術普及会から出された名著「帝都」の凡例に記された如く、「本書は帝都の沿革を記述し、著者自ら遺址を踏査して其の實際を紹介するを目的としたれども、嘗に其の表面にあらわれたる史実の経過と地理の調査とを記述するに止まらず、傍ら、また裏面に潜在する因果の關係を尋ね、其の史の変遷を明にせんことをつとめられ、「帝都を中心とせる著者が古代史上の研究の一斑を公に」されたものであり、「藤原京」にもまた、此の傾向が

展示されて居り、いわば、歴史解明の補助学としての地理の討究にあつた様に見受けられる。

繰返して云うと、「現在に於ける地理が如何に歴史の変遷をして来たか、河川流域の転移、島国日本が其の国家的形成に如何なる地理的影響を被つたか、モンスーン氣候が吾等祖先の生活に如何なる制約特性を与えたか。」等、歴史の發展過程が地理的環境によって如何なる影響を受けたかを、専ら記録文書に拠つて研究し様としたもので、其の主体は歴史の解明にあり、歴史の地理であつた。

四

翻つて考えてみると、地理学の目的は、地域的観点から地域の差異を系統的に捉えるにある。歴史地理学に於ては「現在の地域的特質に到達するまでの發達変化——過去の諸条件の復合關係を研究」する事で、内田寛一先生の言を借りると（「歴史地理学の諸問題」所収、歴史地理学と史学との異同）……或る事項が「ある」のは「どうしてか」「なぜか」と詮索することによって「ある」ことの意義を闡明することになるわけであるが、それを突き込んで行けば行くほど、歴史性にぶつかり、そしてその解明の必要に迫られざるを得なくなる。

ところが、地理学で歴史性に取組む場合には、たとえ時からいへば過去に係つて狭い意味での史学と選ぶところが無いように誤解され易いとしても、そのねらいは飽くまで地理学的であつて、狭義の史学的ではない、即ち狭義の史学は人と人との關係……人を社会國家に括めて可……に主眼を置くのに、地理学では人と自然との關係に主眼を置いている。……下略」。茲に歴史学とは異つた特色を持つ、小牧実繁博士は「先史地理学研究」に於いて越後及羽後海岸平野や、河内平野・出雲平野の具塚調査から地形の復原を試みられ、歴史地理学の対象は、歴史時代に設ける土地地域（景観）であり、之を描出する事が使命職能であるとして、「歴史地理学の目的を以て、理論上は歴史時代の

任意の時の断面に於ける土地・地域（景觀）の描出にありとなし、而も便宜的には、歴史地理学の使命は、地理学、主として現在に於ける土地・地域（景觀）を研究の対象とする地理学への基礎づけ、背景づけにあると考へる」（一〇五頁）とせられ、歴史の發展過程を描くものとは異り、「或る時々の断面に於ける土地・地域を明らかにする為め、過去の景觀を復原・再現せねばならぬ。」と述べられた。いわば、古地理学、即ち過去の或る時代の地理学的研究を力説されたのであった。

此の場合、注意すべきは景觀變遷史的な立場であつて、「一見靜的に見える空間なるものは、實は一方に可變的な歴史を内在せしめている。過去の空間を復原描出しただけでは満足さるべきではなく、各時代時代の復原描出した各空間を、相互に、或は現在と比較し、関連をもたしめる事によつて、自然の意味が歴史の經過と共に如何に變遷するか、或は又、幾千年もの歴史の經過にも不拘、尚、依然として變化しない自然の特質を把握抽出する事が重要な歴史地理学の任務ではないか。例えば、条里施行地域と庄園分布地域、又は、新田開發地域とを比較する事によつて、吾々は過去の人類の可住地域に対する拡大化、或は其の進行地域を具体的に知る事が出来る（藤岡謙二郎「生駒山脈その地理と歴史を語る」）のではあるまいか、いわば歴史地理学が發展史的、動態的に動的な面を持つことであり、それは後年、諸々の人が、特に史学者の側から多く論述するところとなつた。

五

大正時代から昭和の初期にかけて文運の發達と共に、社会經濟史学の興隆が見られ、それと共に歴史地理学の方面にもそれとの協力・援助によつて巾と深さを増して行つた。

農村の研究、集落の地理的研究等現在の人文地理学諸部門の歴史地理的探究が深められて来たのは、専門分野の細

分化と共に一の特徴をなし、地方に於ける郷土史、郷土誌の中に優れた歴史地理学の論文が見られる様になったのも此の表われで、天坊幸彦先生の「上代浪華の歴史地理的研究」に収められた諸篇は其の代表的述作である。

集落地理の方面では小川琢治博士と牧野信之助先生の間に論争された、越中礪波郡の散居制の原因は、散居起原の考察に劃期的な意義を持つ。小川博士は「越中国西部の荘宅」に於いて条里制とフェーンとの関係に重点を置いたのに対し、牧野氏は「旧加賀藩の散居制について」「越中国新開地散居村制三論」に於いて「武家時代社会の研究」・「土地および集落史上の諸問題」所収）加賀藩の新田政策と田地割制度に其の起原を求めて詳論し、一時学界を衝動せしめた。又、今和次郎・藤田元春両先生は民家の建築研究から聚落立地の問題に及んで集落の歴史地理的研究勃興の動因をなしたが、特に、藤田博士の「尺度綜考」は、歴史地理学研究の基礎的工具の解明の意味で不朽の名著である。都市研究に於いては、大類伸博士が城郭史の研究の副産物として「城下町」を採り上げたのが都市研究に新生面を開く端緒となり、三浦周行博士の中世都市に関する一連の研究（主として「日本史の研究」一、二輯に収録）、小野均（後に晃嗣）先生の「近世城下町の研究」・「近世都市の発達」（岩波講座日本歴史の一篇）、幸田成友博士の「江戸と大坂」、豊田博士の「日本の封建都市」、原田伴彦先生の「中世に於ける都市の研究」及び近業「日本封建都市研究」、今井登志喜先生の「都市発達史研究」に収められた「城下の町の地理的条件」・「江戸より東京への推移」・「東東の背景」等、史学者に依る一連の諸労作は、都市の外部形態のみでなく、内部構造・歴史地理的特質が綿密な史料操作に基づいて明瞭となり、此方面の進歩発達に大いなる役割を果している。

今次大戦後に於ては、城下町を各時代の一般的集落と関連づけて解明し様とする浅香幸雄、城下町を近代以前の日本都市の集大成されたものとして把握すると共に、それと現代都市との関連を重視する藤岡謙二郎、寺院配置や地

名・残存景観として残る土地割等の形態を論じた矢島仁吉等の諸先生の業績が次々と発表せられ、高知県島田豊寿先生の「初期城下町の歴史地理学的研究」は老大な土佐国検地帳を分析して中世豪族屋敷から、初期城下町に至る展開を明かにしたことは、平沼淑郎博士の遺稿集「近世寺院門前町の研究」の出版と共に注目されることである。

六

条里の問題に就いても此時期に制期躍路進が見られた。

抑々「条里」に関しては、既に、明治三十四年十一月、史学雑誌の第十二編十一・十二号に、堀田璋左右氏が「条里の制」として述べられたが、之は主として古文書に依った歴史の扱い方で先駆的な役割を果たしたのではあったが、今日の歴史地理学的立場からは、相当の距離をもった作品となっている。近代歴史地理学的解明を加えた主力は京都大学の地理学教室から出た人々、若くは此の教室に関係ある諸先生である。歴史の古い近畿にあって、条里遺址に親しむ機会の多い京大から其勢力の出たのは当然であって小川琢治・米倉二郎・村松繁樹・藤岡謙二郎・吉田敬市・谷岡武雄諸先生の研究業績は不滅の光りを放つが、就中、米倉二郎先生の活躍は頗る目覚ましく、戦後間もなく出された「集落の歴史地理」を始め、「農村計画としての条里制を京大地理論叢第一輯に（昭和七年）、続いて昭和八年の第三輯には「律令時代初期の村落」を、更に昭和二十七年「内田寛一先生遷歴記念地理学論文集」には「原始村落の歴史地理的考察を発表せられ、条里問題に雄々しい活躍ぶりを見せて居られるが、条里地割の中、長地型よりも半折型が先行すると説く、米倉説は、半折型より長地型が旧いとする史学者、特に九大竹内理三説との間に喰違を生じた。然し筆者の私見を以てすると、牛馬耕以後長地型が多くなったとする「米倉説」に賛成したいと思う。社会経済史学六の四（昭和十一年七月）に深谷正秋先生が発表された「条里の地理的研究」は其の内容が日本全国の遺址に及んでいる

点が特色で、後年竹内理三先生の推賞するところとなった。

思うに、条里遺址の研究には「郷」の調査や国府・国分寺の研究と共に、「武内社の研究が伴はねばならぬと信ずる。此点、最近京都学芸大学志賀剛教授の「古代集落立地の上より見た式内社の研究」は交通路の観点から式内社の所在を考定した注目すべき業績であると思う、交通といえば、既に坂本太郎博士の「上代駅制の研究」は、徳田劔一先生の「中世に於ける水運の研究」と共に交通関係に出色の権威を持ち、大態喜邦工学博士の「東海道に於ける本陣の研究」は近世本陣の内部構造を建築の上から執らえ、児玉幸多教授の「近世宿駅制度の研究」は、信州追分宿の構造と機能・財政及び領主の負担などを周辺農村の新らしい動きとの関係において追求したものであって、宿場町の研究に新しい面を開いたものと云つてよい。

勿論之は次に挙げる書物と共に歴史地理学というよりは史学的成果の中に入れるべきであらうが、内部構造の解明が歴史地理学に与える光明は計り知れぬ。古島敏雄教授の「信州中馬の研究」は仲継運搬業として信濃に於ける「中馬」の組織機能を、社会経済史の中に把握し、之を実証的に解明した労作で、近世交通関係の一面を明らかにした美事な結実といわれ、田中啓爾博士の「鉄道開通前の塩及び魚の移入路の研究」と共に其意義は大である。

新田開発の方面では、経済史・社会経済史学の進歩発展と共に「割地制度」・「新田集落の展開過程の把握」等、農政学的な土地の研究から、農業技術史並びに集落形態の要素・条件に及び、新田開発の村落構成、機能に向つて発展した古島敏雄先生の「農業技術史」は名著の誉高く、内田寛一先生の「初島の経済地理に関する研究」・「武荘野の計画的開拓の一例」(地理教育増刊号所収)・「農村の戸口の土地との関係の一面」(地理学研究収載)・「農村の人口問題」(地理論業第一輯)等一連の労作は歴史地理学の新生面を開いたものといわれ此の傾向は矢島仁吉博士の「武

蔵野の集落」、須藤賢・谷岡武雄両先生の共同作業になる「甲府盆地に於ける豪族屋敷」、或は長井政太郎博士の「東北の集落」、地理学詳論に発表された安藤万寿男先生の「江戸時代輪中地域の人口」となり、喜多村俊夫博士の「日本灌漑水利慣行の史的研究」、菊地利夫博士の「新田開発」（西冊）に集積大成されて新田開発の基本的問題が研究し尽された観がある、

かくて、昭和の十年代から、従来の個別の実際的な成果を体系的に受けつぎ、都市研究といわず、農村山村漁村の研究といわず、流通・発展の面に執らえて新しい展開の飛躍的な準備がなされようとしているのが、最近の歴史地理学の容相で、更に従来殆んど顧みられなかった、最近の時相に注意が向けられる契になったのも一の特徴をなし、地理学の上に歴史学・社会学・考古学地理学・農政学等凡ゆる隣接諸科学と結合握手して総合的立体的な調査研究が進められつつあるのも新しい傾向で、歴史地理学の拡大と見ても差支えない様に思われ、対馬の総合調査はその一の表われである。

七

考えてみると、過去そのものを論ずることは地理学の本分から逸脱した様に思われ勝ちであるが、歴史的発達を見る場合にも、地域の拡がりを持たぬ事象はない筈であるから、現在の地域的特質に達する迄の変遷、即ち、その特質の成立に影響する過去の自然的社会的・経済的な諸条件の複合関係を見るのが歴史地理学の本質であらねばならぬ。藤岡先生の語を借りて言えば「現在の都市と周囲の農村との間に見られる人口の交流、或は生産の分業が如何にして起ったか、現存する地域的關係と過去に於ける関係との類以、或は異質性が如何なるものであるかを明らかにして歴史的背景の下、現状と比較して現在を解く鍵」たらしめる事で、地域構造の比較を現在の諸地域のみでなく、過去に

於て求めるのが、歴史地理学の意義であらうと思はれる。茲に於いて資料の博搜と其の実際的研究が基礎条件となるべきである。

(昭和三三、一二、一二稿)